

が認められ、これ以上であれば、施肥によって葉色や新梢の伸びが良くなることはあっても、幹周増加には結びつかないといえる。

第16表 無肥料区の幹周増加率(x)と、施肥(1回)区の幹周増加効果(y)との相関性

機 種	期 間	回 帰 式	r	n	t	P
ヤ ナ ギ	50.9~51.8	$y = -1.63x + 11.5$	-0.942	4	4.03	0.05<
	51.8~52.9	$y = -0.85x + 4.3$	-0.927	4	3.54	0.05<
	50.9~52.9	$y = -1.58x + 16.9$	-0.884	4	2.66	0.05<
プ ラ タ ナ ス	50.9~51.8	$y = -0.91x + 5.0$	-0.736	11	3.25	<0.01
	51.8~52.9	$y = -0.94x + 5.1$	-0.768	10	3.39	<0.01
	50.9~52.9	$y = -0.87x + 11.3$	-0.590	10	2.06	0.05<
イ チ ョ ウ	50.9~51.8	$y = -0.86x + 7.3$	-0.872	12	5.63	<0.001
	51.8~52.9	$y = -0.27x + 1.4$	-0.871	12	5.61	<0.001
	50.9~52.9	$y = -1.34x + 21.3$	-0.976	12	6.83	<0.001

注) xは試験開始時(50年9月)を100とした幹周指数の当該期間における増加量(無施肥区)  
yは同幹周指数の増加量の、施肥区と無施肥区の差

## 伊豆大島の花き園芸

東京都大島農業試験地

浜 田 豊

### はじめに

伊豆大島は、東経139度、北緯34度の太平洋上にあり、東京から南へ約112kmの距離にある。島は東西に約9km、南北15km、周囲約52kmあり、その面積は91平方kmと伊豆諸島の中では最大の島である。土壌は玄武岩質の未熟火山灰土壌に属し、いわゆる細かい砂という感じである。

### 気象条件

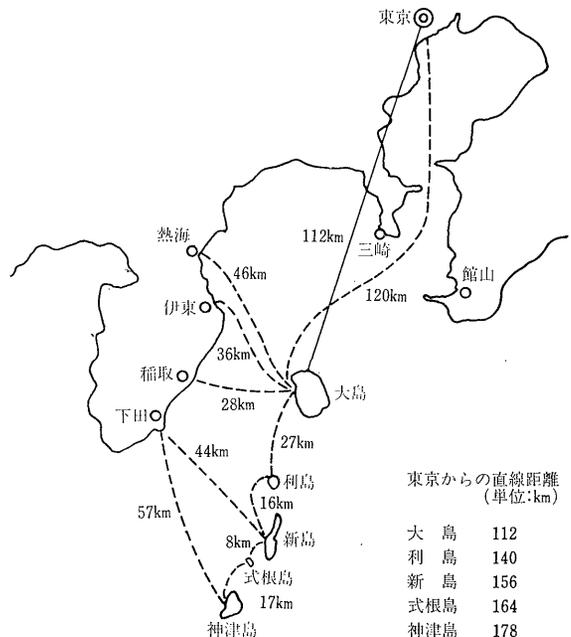
周囲を海洋に囲まれているため、気温の較差が小さく、いわゆる温暖多湿な海洋性気候であり、近くを黒潮(暖流)が流れているため、冬季は同緯度の海域より気候が温暖である。

風は年間平均7m/s前後で、風向は東~北東または西~南西の風がほとんど全体の9割を占めている。冬の季節風(西風)と春季の低気圧による強風が多く、最大風速10m/sを越える強風日数は年間の2/3に達することもあり、全国でも有数の強風地域の1つでもある。

年間降水量は東京の約2倍の300mmにも達する多雨域でもある。

このように気象条件としては、きびしいものがあるが、冬季温暖でしかも夏季はそれほど温度が上がらないため、切花を中心とした花き園芸が繁んに行なわれている。

第1図 大島支庁管内諸島位置図



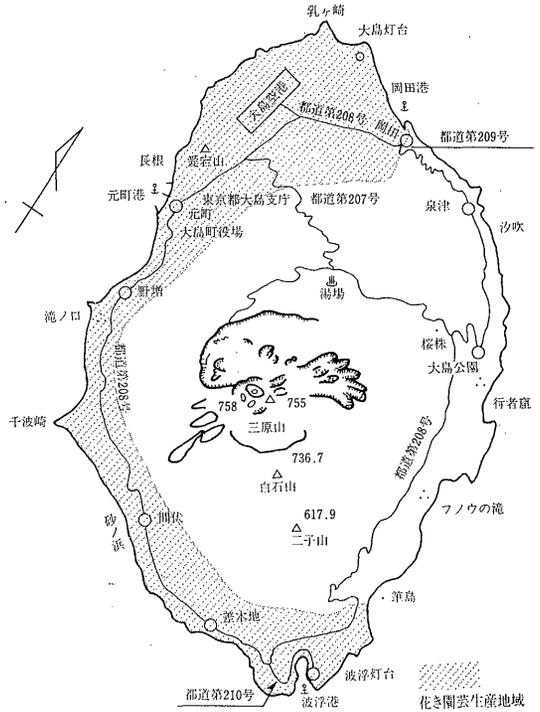
花き生産の現況

伊豆大島には切花類を栽培している農家が600戸、鉢花類を栽培している農家が5戸、花木類を栽培している農家が183戸あるが、年間農業粗収益に対する割合が、20%以下の極めて冷細な農家が切花栽培農家で286戸(47.6%)、鉢物類栽培農家4戸(80.0%)花木類栽培農家90戸(49.2%)あり、農家戸数全体に占める構成比でも48.2%ある。その反面、年間農業粗収益に対する割合が80%を超える農家は、切花類の栽培農家では84戸(14.0%)、花木類の栽培農家では8戸(4.4%)あり、専作化の傾向が見られる。

切花類(切葉、切枝ものを含む)の総作付面積は151.3haあり、鉢もの類を含めると152.3haに達する。花き類の総出荷生産額は11億7,531万円(昭和60年)あり、前年比113.3%で13.3%の増加をしている。そしてその85.4%が東京、神奈川を中心とする関東地域へ出荷されている。

近年、パイプハウスやガラス温室などを利用した施設栽培面積が急げきに伸びているが、総切花作付延べ面積の11.2%に当たる16.97haにすぎない。しかし今後、より専作化するにつれて、経営の安定化をはかるために

第2図 伊豆大島の概略図



第1表 花き類の栽培農家戸数(粗収益の農業粗収益に占める割合階層)

花き類の栽培による粗収益の割合	切花類の栽培による粗収益の割合		鉢物類及び花だん用苗物の栽培による粗収益の割合		花木類の栽培による粗収益の割合	
	栽培農家戸数	構成比	栽培農家戸数	構成比	栽培農家戸数	構成比
年間農業粗収益に対する割合が80%以上	84戸	14.0%	—戸	—%	8戸	4.4%
50%以上 80%未満	100	16.7	—	—	15	8.2
20%以上 50%未満	130	21.7	1	20	70	38.2
20%未満	286	47.6	4	80	90	49.2
昭和60年合計 (a)	600	100%	5	100%	183	100%
前年(59年)実績合計 (b)	595		5		178	

も、自然災害を受けにくい施設利用栽培が一層増加することが予想される。

主な切花類と課題

1. プバルディア

プバルディアは、大島の切花の中心的存在であり、栽培面積、生産額ともに最も多い。加温施設が3ha、無加温施設が10.6ha、露地栽培が3haあり、合計16.6haの栽培面積がある。施設の比率は81.9%にも達する。生産出荷本数は1,100万本で5億4千万円にもなる。近年、加温施設を利用した周年切り(年3回切り)栽培も確立され、品質の向上とともに生産効率の向上が期待されている。ちなみに露地栽培での採花本数は10a当たり、6,400本、平均単価30円であるが、無加温施設利用栽培では、10a当たり6,000本、平均単価50円、加温施設利用栽培では、10a当たり、9,000本、平均単価60円前後

となる。このように施設利用栽培により経営の効率化が認められる。

なお、品種的には、在来系の品種から欧米で改良された、多花性のハイブリッド系品種とくにピンク系を中心とした品種にかわっている。

近年、プバルディア「葉枯れ症状」やウイルス病(CMV?)の発生が目立ち、特産花きの安定化のために農業技術者に大きな課題が課せられている。

2. 枝もの類

畑地で栽培されているイボタ、サイプレス、アジサイ、センリョウから山どりの枝もの、サンキライ(サルトリイバラ)、ヒサカキ、ヤシヤシまで実に種類が多い。半自然状態の林地まで含めて、90haの露地栽培面積を有する。生産量は380万本、平均単価80円前後で3億400万円に達する。しかし、その年の自然環境に左右されや

すく、単位面積当たりの収益は決して良いとは言えず、他の切花類にうつりつつある。とくに山どりの枝もののサンキライは、年々減少の傾向にあり、今後何らかの対応が迫られるだろう。

3. その他の切花類

枝もの類同様、実に多品目を含んでいる。ガーベラ、トルコキキョウ、ストケシア、デルフィニウム、ニゲラ(黒タネ草)、グロリオッサ、カスミソウなどなどである。とくに最近注目を浴びているのがガーベラとトルコキキョウである。ブルディアの価格の低迷や生理障害により急激に伸びている。ガーベラで1.5~2.0ha、トルコキキョウで0.5haの栽培面積がある。もちろん施設を利用した栽培が行なわれている。61年には30aのガーベラの切花経営を目ざす農家すらあるほどである。これに対してトルコキキョウはブルディアの間作としての傾向が強い。

その他の切花類としては27.5haの栽培面積があり、691,1万本の出荷で、1億7,566万円の生産額がある。

4. 切葉類

伊豆大島で何と言っても目立つのが、ハランである。庭先の林地や雑木林の下には、ハランがぎっしりと植えられている。かつてはベラ(アスパラガス・ブルモーサス・ナナス)が多く見られたが、今はハラン全盛といっ

ても過言ではない。

この他に、オモトやレザーファンなどもあるが、近年一部の生産者の間で脚光を浴びているルスカスの導入が見られ、増加の傾向にある。

ハランを始めとする露地の切葉も、品質のよいものを作るために、パイプハウスを利用した栽培が始まっており、今後さらに増加することが予想される。

切葉類の総栽培面積は8.6ha(施設利用0.6ha、露地栽培8.0ha)出荷本数700万本、生産額7,810万円である。

5. 小菊

かつては、大島の露地切花の代表であった小菊も、近年他産地におされて減少傾向にある。とくに価格の低迷による収益性の低下は、その減少傾向に拍車をかけている。作付延面積は5.6haあり、100万本の出荷があるが、平均単価が20円前後で、2,040万円の生産額がある。

小菊の場合も施設利用による高品質高商品化により、生き残りを目ざす動きもあるが外圧が大きく伸び悩みの状況にある。

6. ストレチア(極楽鳥花)

伊豆諸島の中の八丈島では、露地の切花として栽培されているが、大島では、冬季に低温による被害を受けやすいため、施設を利用した高品質の切花生産が行なわれている。特に、加温施設を利用した栽培は、今後の大島

第2表 切花類、鉢もの類及び花壇用苗もの類の作付面積、出荷数量及び生産額

区市町村名	大 島 町
-------	-------

区 分	種 類 名	昭 和 6 0 年 実 績														
		施 設 栽 培						露 地 栽 培			施設・露地栽培計					
		加温室栽培		無加温室栽培		加温・無加温室栽培小計		露地栽培	施設栽培		露地栽培	施設栽培				
作付延面積	出荷数量	生産額	作付延面積	出荷数量	生産額	作付延面積	出荷数量	生産額	作付延面積	出荷数量	生産額	作付延面積	出荷数量	生産額		
	a	千本	千円	10a	20千本	800千円	10a	20千本	800千円	550a	980千本	19,600千円	560a	1,000千本	20,400千円	
切花類 切葉類 鉢もの類 (等を含む)	きく															
	カーネーション															
	ゆり				5	7	840	5	7	840	-	-	-	5	7	840
	ばら															
	ストック															
	チューリップ															
	フリージア				40	240	8,400	40	240	8,400	50	210	5,250	90	450	13,650
	グラジオラス									10	40	2,000	10	40	2,000	
	スイセン				40	48	2,880	40	48	2,880	35	22	880	75	70	3,760
	アバルディア	300	2,700	162,000	1,060	6,360	318,000	1,360	9,050	480,000	300	1,940	58,200	1,660	11,000	538,200
ストレチア	10	30	6,000	110	220	26,400	120	250	32,400				120	250	32,400	
枝もの類										9,000	3,800	304,000	9,000	3,800	304,000	
切葉類				60	540	13,500	60	540	13,500	800	6,460	64,600	860	7,000	78,100	
その他切花類				75	562	16,860	75	562	16,860	2,675	6,352	158,800	2,750	6,914	175,650	
小計	310	2,730	168,000	1,400	7,997	387,680	1,710	10,727	555,680	13,420	19,804	613,330	15,130	30,531	1,169,010	
鉢もの類	シクラメン		千鉢			千鉢			千鉢		千鉢			千鉢		
	キク															
	観葉植物															
	洋らん				7			7					7			
	プリムラ類															
	ベゴニア															
	花木類															
	その他鉢物				13	3	2,700	13	3	2,700	80	40	3,600	93	43	6,300
	小計				20	3	2,700	20	3	2,700	80	40	3,600	100	43	6,300
	花壇用苗物		千本			千本			千本		千本			千本		
60年合計(ア)	310		168,000	1,420		390,380	1,730		558,380	13,500		616,930	15,230		1,175,310	
前年(59)合計(イ)	310		136,800	1,320		259,935	1,630		396,735	13,240		640,785	14,870		1,037,520	

のストレチア栽培を占なうものとして注目される。

栽培延面積は加温、無加温施設合せて1.2haあり、年間25万本の出荷があり、3,240万円の生産額がある。

7. フリージア

大島の南部地域を中心にフリージアの切花生産が見られる。かつては、ビニルハウスを利用して大面積の栽培が行なわれていたが、ウィルス病、冷蔵施設の利用、価格の低迷に対して球根の高騰など原因して栽培面積は急げきに減少している。昭和60年の実績では0.9ha(施設0.4ha,露地0.5ha),出荷本数45万本,生産額1,365万円である。

しかし、近年、実生系品種の出現とウィルスフリー養成球の出現により、花型・花色の大型化多様化とともに草勢の回復により注目を浴びているが、いまひとつ盛り上がり方を欠いている。フリージア生産拡大に向けてのカンフル剤になってほしいものである。

8. その他の球根切花

この他の主なものとして、スイセンが0.75ha 出荷本数7万本,生産額376万円,グラジオラス0.1ha,出荷本数4万本,生産額200万円,ユリ類,5a,出荷本数7千本,生産額84万円等があるが、いずれも球根に比べて切花の価格が低迷しているため、減少傾向にある。

9. 鉢もの類

切花主体の大島にあって、ごくわずかではあるが、鉢物生産が行なわれている。シンビジウムを初めとする高級花き類7aが、ブバルディア、ゼラニウム、シダ類が一部農家で生産されており、約1haの面積と4万3千鉢、630万円の生産額がある。

しかし、今のところは、船便を利用しなければならぬため、出荷の手間と経費が重み、収益性が悪い。

ただ、今後、船便の改善、コンテナの大型化、さらに中央卸売市場の開設など、受け入れの整備が進むにつれて、またコンテナの利用効率の向上などを考慮すると、

切花中心の花き園芸からの危険分散のためにも、行政として何らかの対応を迫られる時が来ることであろう。

おわりに

大島の花き園芸の進展に刺激されて、近年、隣りの利島ではサクユリの球根生産が、新島では温泉熱を利用したガーベラ、ブバルディアの切花生産が、さらに神々が集まったという伝説をもつ神津島では、温暖な気候と豊富な水を利用してガーベラの切花生産がすでに始まっている。

第3表 切花類、鉢物類及び花壇用苗物の消費地域別、月別出荷数量

区分	種類名	消費地域別出荷数量								
		関東			北陸	東海	近畿	中国	九州	計
		北海道	東北	その他						
切花類 (切枝もの等を含む)	きく	55	780	160	1	1	1	2	-	1,000
	カーネーション									
	ゆり		5	2	-	-	-	-	-	7
	バラ									
	ストック									
	チューリップ									
	フリージア	1	180	89	-	112	68	-	-	450
	グラジオラス		20	20	-	-	-	-	-	40
	スイセン	8	42	18	-	2	-	-	-	70
	ブバルディア	495	8,580	1,320	22	220	330	33	-	11,000
	ストレチア	125	75	50	-	-	-	-	-	250
	枝もの類	760	2,090	874	-	38	38	-	-	3,800
	切葉類	700	4,200	1,540	70	210	210	70	-	7,000
	その他切花類	691	4,148	1,867	69	69	35	35	-	6,914
小計	2,835	20,120	5,940	162	652	682	140	-	30,531	
鉢もの類	シクラメン									
	キク									
	観葉植物									
	洋らん									
	アリムラ類									
	ペゴニア類									
花壇用苗物	花木類									
	その他鉢物		43							43
	小計		43							43
合計	2,835	20,163	5,940	162	652	682	140	-	30,574	

# チッソ旭の新肥料紹介

★作物の要求に合わせて肥料成分の溶け方を調節できる画期的コーティング肥料……………

**ロング** <被覆磷硝安加里>      **LPコート** <被覆尿素>

★パーミキュライト園芸床土用資材……………**与作V1号**

★硝酸系肥料のNo.1……………**磷硝安加里**

**チッソ旭肥料株式会社**